

■対談：卒業生×本校元教員

今、思う…

あの日の「びわ湖学習」, 「BIWAKO TIME」

「BIWAKO TIME」とは何なのか、意義はあるのか？また活動中の生徒は、何を考えて行動し、教員はどのようなねらいを持っているのか。

——4名の本校卒業生と、3名の元教員にお集まりいただき、滋賀大附属中を離れてからの視点で、「BIWAKO TIME」について語っていただきました。



折居幸子さん
小学校教諭
平成6年度卒業



森田美保さん
小学校教諭
平成8年度卒業



澤 正貢さん
大学4年生
平成10年度卒業

■「びわ湖学習」創設の思い

藤池 みなさんお忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。本日は、みなさんが本校に在学、在勤されていた頃の「びわ湖学習」, 「BIWAKO TIME」について、当時の思い出をいろいろとお話いただきたいと思います。よろしくをお願いします。まずは昭和58年度に「びわ湖学習」を始められた経緯について、教えていただけますか。

橋本 授業で学習した内容が、単なる知識や技能の習得に終わってしまうと、それは本当の学習とはいえない。いわゆる生きてはたらく力を付けさせたいと、昭和57年度の研究開発に名乗りをあげて、昭和57年1月に文部省（当時）に説明しに行ったんです。滋賀大学教育学部附属中学校は滋賀県の半分近くの地域から生徒が来ている。だから生徒にとって郷土といえばびわ湖や。びわ湖を中心に郷土研究を進めていきたいと説明したんです。すると、2月末か3月初めに文部省から開発研究を滋賀大附属中で認めると電話があって、昭和57年度の4月から3年間の開発研究に取り組んだ*わけです。

南出 当時、昭和56, 57年あたりには、生涯学習が非常に必要だという世の中の流れがありました。それから本校では、世の中に出て役に立つ、生きる力とか生きてはたらく力を附属中学校で付けようやないかという研究の流れがありました。それから世の中は、今で言う環境教育、その当時は公害の問題を中心にしながら、びわ湖条例もできるし、びわ湖の問題をどうするのかという滋賀県の流れがありました。

藤池 私がお聞きしたところでは、授業を通しての学力は子どもたちに付いていくけれど、いったん外へ出てしまうと、例えば学校生活とは別の所では、その力を生かし切れていなかったと。それを何とかしたいという思いもあったとお聞きしたんですが。

南出 当時はねえ、教科の力をベースにして、生活に生きて働く力をどう付けていくかということが課題でした。

例えば環境を良くするというのであれば、理科の力も保健体育の力も社会科の力も、あるいは数学的な考え方も必要だし、びわ湖学習でねらっているような力を付けていくことが大事だということに考えていたんです。総合学習が必要ということも国の流れとして少しずつ出てきてきましたからね。だからそういう力を付けていきたいという思いはありましたね。

橋本 今でこそ、総合的な学習の時間やゆとりの時間等がありますが、昭和56, 57年あたりは、まだ、旧の教育課程の中でやっていました。やはり教科の授業時数を減らすことには、教職員全員が反対で、総合的な学習の時間を生み出すのはとても大変でした。だから、2週間を1つのサイクルにして、道徳の時間や学活の時間等をまとめ取りする等し、教科の時間数を減らさないことを前提としていました。

南出 それと、ここで、びわ湖学習を始めた当初の18の分科会テーマについてのお話をしますと、教職員に「さあ、びわ湖学習をやろう」と声をかけると、その時にすぐ教職員から出てくるのは、「そんな知識ありません。例えば、私たち社会

の教師が、理科の詳しい水質検査の知識がないのにどうするのですか？」という声でした。それらの声に対しては、あくまでも生きて働く力を付けるのだと、そのために学習の方法とやり方を勉強するのだと、そして、知識についてはその学習過程の中で、生徒と一緒に勉強していくなんだということを強調しました。そのような話し合いの中で、びわ湖学習は教職員全員で進めていこうということになりました。だから、教職員数と同じ18のテーマを作ったのです。15でも20でも具合が悪い、テーマが18必要だったんです。

仲谷 実は、分科会の数が18というのは教職員が全員出てしまって、指導する側としては難しい。職員室が誰もいなくなるんで。ちょっと縮小していこうという時期に、私はちょうど研究主任をさせていただいたんです。「BIWAKO TIME」は当時から学び方を学ぶ学習として位置付けて実施していました。その中には三本柱として郷土学習、国際理解学習と環境学習を入れて15の分科会にしました。

■異学年合同のねらいと意義

仲谷 分科会を18から15にした時に、いちばん大事にしたのは、やはり異学年です。附属ならではの異学年集団を大事に考えたんです。

藤池 当初から異学年合同で計画されたんですか？

橋本 1年生の校外学習の時には、学級をグループに分けて班別自主研修を行って、2年生の時には学年の中で分けて、好きな方面に行くという方法があった。それで総合学習の時には、全校を縦割りですべてやっていた。そういう発想が最初からありました。

藤池 それが生徒の立場からすると、プラスだった？マイナスの方が大きかった？あの先輩が嫌だとか。(全員笑い)

澤 それも含めて。

藤池 それも含めて大切な学びがあったわけですね。教師の意図からすると、1つのグループの中に必ずそれぞれの学年のメンバーがいるということを考えてましたよね。

仲谷 考えてました。いろいろな知識や経験がそれぞれの学年を通して先輩から後輩へ伝達していくようなことをねらっていました。

■「びわ湖学習」、「BIWAKO TIME」の思い出

藤池 あなた方が中学校の頃の「びわ湖学習」、または、「BIWAKO TIME」についてどんな思い出がありますか。印象も含めてお話しください。

折居 自分が覚えているのは、休みの日に、みんなで集まって瀬田川の調査に行ったことです。そのときも学校からビデオカメラ等の機材を借りて、自分たちが現地に行って調査したのですが、その時の私にとっては学校以外の場で学べることがすごく楽しかったです。本で見るだけでなく、実際に現場に行くと、びわ湖の様子が、においであるとか、ただ見るだけでなく、五感を使っている感じることができたのでよかったなと思っています。

そして、これと決まった方法もなく、自分たちでやりたいように計画から全部立てさせてもらって、学びの自由がすごくありましたから、やりたいことができる、その分、責任は自分たちにあったので、最後の発表まで自分たちで何とかしてこぎつけないといけないといった感じでやっていた記憶があります。友達とも大変協力してやりましたし、1年生から3年生が混ざってましたので、上の学年の先輩から、こういうことができるんだということを教えてもらったりとか、縦の関係もあってよかったなと思っています。

森田 私も、外に出ておもしろかった思い出があります。してはいけないこともしてみたい感じで、したことのない実験を友達とワイワイしたりと楽しんでいました。ただ、いざ、発表に向けての準備などでは、グループの中がなかなかうまくいかなくて、「もっとこうしてよ！」とか言ったり、先生にも相談したりと、そういう経験も初めてしました。また、自分は発表するのが苦手だったのですが、上手に発表される先輩などを見て、「ああすごいな。」と思ったりしていました。



八十住慧史さん
大学4回生
平成10年度卒業



橋本茂昭さん
滋賀県教育会会長
本校勤務昭和37～46、54～58年度
元副校長(昭和54～58年度)



南出儀一郎さん
野洲市教育研究所副所長
本校勤務昭和53～平成元年度
元研究主任(昭和61、63年度)



仲谷富美夫さん
 湖南市立石部中学校教頭
 本校勤務昭和61～平成9年度
 元研究主任（平成8～9年度）



藤池 聡
 本校勤務平成4～9, 15年度～
 現副校長(平成15年度～)

澤 やっぱ先輩の存在は大きくて、とても頼れるし、こういう風にしたらいんだなということがよくわかりました。また、逆に、自分が上の学年になると、後輩にいろいろと教えないといけないという、責任を感じる場となっていきました。また、私も人前で話すというのは苦手だったのですが、大学のゼミなどで、何か発表するときや、まとめる作業の場面でも、「BIWAKO TIME」の経験があってよかったなと思います。

また、滋賀の郷土などは、このような機会がないと調べたりしなかったし、身近なことほど気付かなかつたりするものなので、そういう意味でも、自分の郷土について知るといのは非常に良かったです。

八十住 僕は、すごく理科が嫌いだったし、あまり校外に出て水質調査をしたりというのは面倒だったので、学校に残って本を読んだりして調べられることをしようと思っていた記憶があります。そういう感覚で自分の研究テーマも選んでいたことを覚えています。そして、当時はコンピュータとか、インターネット等も使ってなくて、実際には図書室で調べていることが多く、そのときの様子でよく覚えているのは、よく動いている人とそうでない人の差が激しかったということです。真剣に調べている人もいれば、正直寝ている人もいたりしました。

よかったと思うことは、先ほど澤君も言っていたのですが、発表する、人にわかりやすく物事を伝える力だとか、後輩とかを指導して人を動かす力だとかいう点で、興味・関心や調べ方よりもいい経験をしたと思っています。

■必修教科の学習と総合学習「BIWAKO TIME」

藤池 教科の学習と「びわ湖学習」、「BIWAKO TIME」は、生徒の立場から考えて何か関連はありましたか？

八十住 わりと当時から社会の授業などでは、「BIWAKO TIME」のように、例えば「ニュースキャスターになろう」というタイトルで、班に分かれて時事問題を調べたりといったことをしていました。また、国語でも、「文学新聞をつくろう」など、文学者を調べたりとかいうことをしていたので、そういう時は全くやっていることは「BIWAKO TIME」。実際に、知識として「BIWAKO TIME」のことが役に立つというよりは、その学習方法が役に立っていたという感じです。

折居 教科は教科、「BIWAKO TIME」は「BIWAKO TIME」というくくりではなくて、グループ内で学習して、調べて、最後に発表という形がどの教科でも多かったの、その発表の仕方であるとか調べ方に関しては、全部同じだったかなって思います。その機会が多かった分、だんだん慣れていったという感覚があります。

藤池 そうすると生徒の立場でいうと、あまり差はなかったの？

森田 数学等はわからないような時間もありましたが、「BIWAKO TIME」では、知識を詰め込まれたりとか、テストがあったりするわけでもないの、気持ちは楽でした。

■「BIWAKO TIME」に思うこと

森田 自分の体験になるのですが、長野県の松本にある附属中へ教育実習に行ったときのことで、気づいたことは、子どもたちがこんなことが調べたいなあと感じたら、すぐに調べることができる環境づくりができていたことです。子どもの好奇心がいろいろな方面に向くと、現実的にそれらの願いをすべてかなえることは難しい。また、いろんなグループができるとそれぞれを深く見てあげることも難しくなります。そこで、松本では、例えば、学校の近くに、毎年、ある家から田んぼを借りたりとお世話になったり、また、近所の工場の社長さんをお願いをして、地域教材をつくったりしているそうです。このように身近なところ、地域と関わることを財産としているということでした。

藤池 公立の中学校では地域とのつながりがあり、逆に、強いつながりがないとやっていけないところがあります。その点、本校は難しい。どこまでを地域とするか。とくに来年から全県一区になる本校では、やはりびわ湖、特に、滋賀県と

いう郷土を考えるしかないとも言えます。

折居 6年生の1学期の総合学習でふるさと学習をしました。何十年経っても、自分の学校が好きでもう一度帰ってきたいという気持ちを育むことを目指して学習しました。それが附属中学校ではびわ湖だったし、卒業生同士の会話でも「びわ湖っていいよなあ」ということになっている。実は、私の大学の卒業研究は、附属中学校でのびわ湖学習をもとにまとめました。異学年合同のグループで、実際に足を運んだら、びわ湖に関係している人とお話ができたりと、そこで体験したことは今の私の財産であり、附属中学校の学習では「BIWAKO TIME」が一番印象に残っています。とても大切な学習だと思うのでこれからも引き続いてやってほしいです。

八十住 先生方があまり肩肘張ってやらない方がいいと思う。伝統を大切にすることはいいことだと思いますけど、附属中学校はこうでなければならないとか、「BIWAKO TIME」を発展させなくてはならないと考えるべきではないと思います。なかなか中学生に「BIWAKO TIME」のねらいをすべて理解させるのは難しいと思うんです。正直、中学生の時、活動しているときは、何をやっていいのかわからないところもあったし、全ての人が主体的にやっていたわけではないんです。でも学ぶということは学生の間だけで終わることでもないし、大人になってからも学び続けていく、学び方の基本となる部分だと思います。あんまり生徒にこうやっていくべきだとか押し付けるのではなくて、やり方とか学び方とか、大げさに言えば、どう生きていくかという、そのエッセンスだけを注入してあげられればいいんじゃないかなと思います。

藤池 そんなに肩肘張りすぎてるかなあ。(笑)

■これからの「BIWAKO TIME」に期待すること

南出 「BIWAKO TIME」のねらいはいろいろあっても、生徒の方には中学生の時に伝わるわけではありません。でも、こちらがこんな気持ちで取り組んでいたということは大切です。

卒業生の皆さんに出会って附属中学校の「BIWAKO TIME」の思い出を聞くと、附属中学校の学習が、卒論を書いたり、会社の課長になっていろいろと企画をするときに役に立っていますよというお話を聞かせてもらったりします。先生に質問をしてもね、何やら調べるとかいうことで、答えを教えてもらえなかった、それが実は後になって役に立っていますよということでした。

それからもう1つ、体験的な学習をしない、観察や実験をしない、総合的に物事を考えなさいということは、最初の学習指導要領からずっと書かれてきたことなんです。時代の変遷もありますが、それを我々教師はねらいながらやってきた。これからの生涯学習社会だとか、一言で言うと生きて働く力を付けていくために、どういう形ですればいいかということを考えてきた結果が、「BIWAKO TIME」です。今これを、全部ご破算にして、一からつくり直してもまた今と同じものができると思う。

橋本 子どもの主体性を伸ばすことを考えたときに、教科学習だけではなかなかそこまでいかない。知識注入になる。びわ湖学習は、自分で考えて、自分で行動し、自分で物事を決定していくという力を、びわ湖を通して付けさせていきたいという1つの学習モデルです。滋賀県では小学校5年生でフローティングスクールで、びわ湖に関心を持たせる教育を進めています。総合学習では地域に根ざした教育をすすめるという一面もあり、附属中学校ではびわ湖を中心に据えている。今後も、内容が広がりすぎないように注意はしながらも、将来生きて働く力を付けるということに焦点化して、ぜひ伝統として続けていってもらいたい。

藤池 懐かしいお話から、示唆に富んだお話まで、いろいろなお話をお聞かせいただきました。本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。



平成 17 (2005) 年 10 月 23 日 (日) 午前
滋賀大学教育学部附属中学校・多目的教室にて